

【 6 】

氏 名	岸 田 達 也 きし たつ や
学位の種類	文 学 博 士
学位記番号	論 文 博 第 118 号
学位授与の日付	昭 和 52 年 11 月 24 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学位論文題目	ドイツ史学思想史研究

論文調査委員 (主査) 教授 越智武臣 教授 今津 晃 教授 辻村公一

論 文 内 容 の 要 旨

本研究を一貫するテーマは、ドロイゼンの『史学論』から第二次大戦後の「構造史」派にいたる、ドイツ歴史学の伝統的思想ならびにその批判的継承の経緯である。それはまた、ヨーロッパ歴史思想の二大水脈ともいうべき「ドイツ理想主義」と「西欧実証主義」の対決の過程であったとも著者は考える。

まず第一編では、19世紀中葉のドロイゼンの『史学論』を根幹として（第一章）、これがマイネッケ、ヒンツェの史学へといかにして分枝していったか、その事情が述べられる（第二章、第三章）。著者がドロイゼンの『史学論』に筆を起すのは、それが当時の俗流的唯物論、つまり歴史の物化に対する批判として、歴史学固有の認識方法と認識領域とを確立するものであったからである。このような意味での「実証主義」は、当時英仏学界に流行し、またドイツにもある程度浸透をみたものであったが、ドロイゼンにとっては、それはヨーロッパ文明の危機を、その病弊を告知するものとして受けとられた。それゆえにこそ、『史学論』は、「古き良き時代」のドイツ理想主義の立場から、これに加えた痛撃であり、またその意味での文明批判の書であったとされる。そもそも歴史的事実には、自然的事実と異なる独自性があり、歴史家はたんなる機械論的・要素還元論的分析によってはこれを理解することができない。ただ「探究的理解」の方法があるのみである。ドロイゼンのいわゆる「理解論」であるが、この方法もまた彼が肺腑に感じたこの危機意識のなかに胚胎した。かくして、『史学論』は、新カント派の興隆に先立つこと数年、またディルタイに発する「精神科学派」の先駆ともなって、20世紀歴史思想への展望を切り開いた、と著者はいう。

次に著者が注目するのは、若き日ともにドロイゼンの講筵に座し、のちやや異なった道を歩むことになった二人の歴史家マイネッケとヒンツェについてである。著者によれば、それはドロイゼンの『史学論』の受けとめ方に原因があったからであるという。すなわち、マイネッケがおもにドロイゼンの理解論を継承したのに対して、ヒンツェはドロイゼンがある限界のもとに承認した「プラグマティスムス」（因果的歴史分析の方法）を受容した。ここに理念史家マイネッケの出発があり、いっぽう社会学と歴

史学の架橋者ヒンツェの、正統史学内での特異な地位が辿られる、と。しかし、ヒンツェのこの立場こそ、やがてシュモラー、ウェーバーらの方法とも親和関係をもつことによって、今日「構造史」派に代表される西独新史学の伏流となった。以上第一編の要旨である。

次に第二編では、ベルンハイム、ベーロウ、それといわゆる「ランケ・ルネッサンス」の史家たちが論ぜられる。また彼らを中心に19世紀末および20世紀初頭のドイツ史学の状況が語られる。まず第一章は、わが国でもよく知られた『歴史学方法教本』の著者ベルンハイムに関する考察。従来ベルンハイムをもってドイツ正統史学の立場に立つ歴史家、またこの見地から歴史の技術論を展開したものと目してきたのは、とくに明治期以来のわが国の学界であったが、著者は最近の研究を手掛りに、この誤りを訂正する。著者によれば、ベルンハイムは正統史学の嫡流というよりも、むしろ正統史学と実証主義史学の中間にこそ位置づけられるべき史家であった。第二章は、歴史学上しばしば問題とされる「類型的概念」なるものが、いかにして発生してきたかを伝統的歴史学の系譜に即しながら、代表的な国制史家でもあり経済史家でもあったベーロウにつき考察したもの。著者はこれを地方史家として出発したベーロウの鋭い歴史感覚に帰する。この感覚こそ、歴史学派経済学の発展段階論を批判する過程で、段階概念を実質的に類型概念へと転化させたところに生じた。第三章は、いわゆる「ランケ・ルネッサンス」を回顧しつつ、19世紀末ドイツ政治史学の動向が展望される。登場する歴史家ハンス・デルブリュック、マクス・レンツ、エーリヒ・マルクス、オットー・ヒンツェ、ヘルマン・オンケン、フリードリヒ・マイネッケ等々。周知のように、ビスマルクによる帝国建設後のドイツ歴史学にはランケに、よる厳密な史料批判主義が復興するいっぽうで、強力になった帝国を所与のものとして受けとり、ランケの『強国論』の観点から列強の角逐を眺めようとする風潮を生んだ。その意味で彼らの歴史思想は、依然として過去との連続性のうえに立ち、その観点もまたヨーロッパ中心主義を脱却するものではなかった。しかし、第一次世界大戦におけるドイツの敗北と帝国の崩壊とは、新ランケ学派にも分裂を生じさせた。すなわち、従来の歴史観に固執するものと、これに批判と反省を加えるものと。そして、後者の代表こそ、ほかならぬマイネッケであった、と著者は主張する。

第二次大戦以後をとり扱う第三編は、ふたたび経験した敗戦と伝統的歴史学に対する自己反省を契機に、マイネッケやデヒーオが新たな史学思想の展開を試み（第一部）、やがてこれが「構造史」の台頭へと結果してゆく過程が述べられる（第二部）。第一部第一章では有名なマイネッケの一書『ランケとブルクハルト』が扱われ、第二章では国際政治史の分野でのデヒーオの著作が扱われる。著者はこれらがいずれもドイツ正統史学への批判と反省であったと抑え、また第三章では、コンツェ、シーダー、ヴァーグナーらの史学を、その提唱する「構造史」に關説しながら解析する。そしてここにもまた同様の歴史意識が動いていたとされるのである。そもそも「構造史」とは、フランスの「年報派」に端を発する現代ヨーロッパ史学の一大潮流であるが、たんなる事件史的政治史よりも、歴史における地理的所与、社会経済的深層、つまり彼らのいう「構造」を究明することに優位をおく。今次大戦後西独史学界はこれを好意をもって迎えたといわれるが、そこにも時代の構造的変化に処してゆこうとする史家の自覚があったのだ、と著者はいう。ただ、西独の「構造史」派の場合、「事件史」と「構造史」とは歴史学にとって対等なものと考えられ、この点フランスのそれとは微妙な差異をみせている。そこにもまだ現在

に揺曳するドイツ正統史学の影があるのだ、と著者はみる。

第二部第一章は、現代西独史学界の長老リッターを論ずる。ここにおいて西独史家の「構造史」に対する態度は一段と明らかにされる。リッターもまた「構造史」を評価しないではなかったが、この旧世代史家に特徴的であったのは、依然としてこの国史学界の伝統「事件史」の優位であった。だからこそまた、リッターら旧世代から、上記コンツェら新世代へと急速に変貌してゆくドイツ史学界の内情が照射される。第二章は、オランダの史家ホイジンガの歴史の「形態変化」についての暗示が、西独史家のあいだにいかにか受けとめられ、発展させられていったかを明らかにする。このオランダ史家が悲愁のなかに吐露した「形態変化」を「構造変化」と受けとめ、むしろ積極的に新史学の一形式「構造史」を提唱したのはコンツェであった、と。この意味で、ホイジンガ史学もまた現代西独史学思想の重要な一源泉であった、と著者はいう。

ここまでくれば、最後に論じられなければならないのが、フランスにおける「構造史」の概念である。第三章はこれに当てられる。著者はここで第三編第一部第三章の論旨をくり返しつつ、改めて西独・フランス両国間の「構造史」の異同を明らかにする。まず今世紀最大の傑作ともいわれるフランスの史家ブローデルの主著・論文によりつつ、フランスにおける「構造史」が解明されるが、それによれば、歴史は「事件史」、「変動史」、「構造史」の三層より成るものであった。しかも、前述のごとく「構造史」はここでは優位に立つ。ところがこれを導入したドイツにおいては、「変動史」と「構造史」の区分が排されたのみならず、ド・ラ・ブラーシュ以来フランス史学の一特徴でもあった「地理的環境」への配慮は、「構造史」の分野から除かれる。しかも、「事件史」と「構造史」とは相互補完的なものとされるのである。著者は改めて独仏史学の「個性の深さ、伝統の重み」に言及しつつ筆を置く。

なお本書には付論が一篇添えられている。ヴェーラー、モムゼンらのいう「歴史主義の彼方の歴史学」についての一論である。著者によれば、これら若い世代の歴史家は、その社会学への傾斜によって、ついに伝統的歴史学を越えるにいたった、と。いまだ歴史主義の残照に輝いたマイネッケらの第一世代、シーダーら「構造史」派の第二世代、そしてここにヴェーラーらの第三世代と並べてみると一線が画さるべきは、前二者のあいだというよりも、むしろ後二者のあいだであった、と著者は結ぶのである。

論文審査の結果の要旨

歴史家は歴史を叙述する。しかし、歴史学そのものの意味を問う歴史家は少ない。洋の東西を問わず、この問題は多くの場合優れた哲学者に委ねられて今日にいたった。とはいえ、歴史家にとっても、叙述への関心と同時に、つねに叙述そのものを主題化し、その意味を問う必要のあることはいうまでもない。この場合、その時系列的な対象化は、当然のことながら一つの史学史を形成するであろう。著者は、かならずこの史学史という分野を、終始歩み続けてきた、わが国では数少ない史学徒の一人である。著者が「ベーロウの『経済発展段階説批判』とその背景」によって学界に登場したのが1957年。爾後20年、複雑なドイツ史学理論の叢林を分け、いま正統史学の山系をみきわめてここに一書をえた。その間ものされた多くの訳業とともに、われわれはまずその功と労とを評価したいと思う。

周知のごとく、ドイツ史学史の研究としては、わが国では故坂口 昂博士の京都帝国大学における連

続講義『独逸史学史』をもって嚆矢とするが、その後断片的な言及をのぞいては、ほとんど皆無に近かった。坂口博士の本書が1932年の出版であることを思えば、今回上梓をみた本書の意義はおのずから明らかであろう。われわれは実に40年を経て、第二の包括的なドイツ史学史をもったといえるのである。無論かくいうことは、諸外国においても全然類書がなかったということではない。これも僅少ではあるが、管見の範囲に属するものとしては、例えばアメリカの学者イガーズの近著『ドイツの歴史観念』（1968年）などは、扱う範囲において本書のそれと相蔽う。いまこれらの労作をも念頭においたうえで、従来の研究史に照して、本書の特徴はどこにあるか、最初にこの点を指摘してみたい。

まず本書を繙くとき、一見奇異の感じを抱かせるものは、それがドロイゼンの史学をもって初められていることである。このような場合、ドイツ史学を論ずるほどのものならば、常識的にはまずランケを想起する。ランケこそは近代史学の樹立者、そしてドロイゼンはプロイセン学派に属するせいぜい偏狭な一政治史家にすぎなかった。少なくともこれが従来の通説である。著者はまずこの通説に挑戦する。その理由として著者が力説してやまぬのは、例えばランケみずからもいうように、この批判史学の創始者に著しかったのは、彼が史料批判を通じて、なおそこに「純粹事実の復原」を意図したことであった。これに反して、ドロイゼンにあっては、「本来の歴史事実」は決して復原できるものではない。歴史とは過去に対する「人間精神の加工」であり、そこに自然的事実の復原とはおのずから異なる歴史学固有の領域とまたそれに応じた認識方法がなければならない。つまり彼のいう「探究的理解」の方法であるが、これこそその後の歴史理論の発展にとって重要な自覚であった、と著者はいう。ドロイゼンの位置をも含めて、史学史研究に新たな問題を提起したものといえよう。なお、ドロイゼンに関連するものとして、一見これとは肌合いを異にする社会史家ヒンツェの史学をも、正統派史学の脈絡のなかに位置づけたことも特筆されてよい。従来ドイツ正統派史学に対する通念として、それがもっぱら理念史にだけ踞踏して、社会史・経済史には理解を示さなかったという非難にも近い言辞の弄されてきたことを考えれば、これも通念の訂正を迫るものである。ヒンツェ史学は後述するとき今日の「構造史」派史学を予見したものとして、近時とみに再評価の声が高いが、この点「構造史」派史学をもって正統派史学とは別の分枝に生い立ったとする前掲イガーズらの認識とは根本的に異なっている。

次に注目すべきは、ベルンハイムに対する新解釈である。周知のように、彼の『歴史学方法教本』は明治年間わが国に輸入されて以来、その翻訳や解説ともあいまって、大学歴史教育においては、まさに教科書的な位置をさえ占めてきた。そのさい、錚々たる斯学の先学の説いたところは、それがランケに初まるドイツ正統史学の教本であるということであった。しかし、著者はこれに対しても異議を唱える。というのも、かつてドイツ史学界に波紋を投じたかのランプレヒト論争からも明らかなように、正統派史学にとっては論敵ランプレヒトの史論にも、ベルンハイムのそれは一脈通じるものをもっていったからである。このための新史料の提示と周到明快な論証。今後史学史を講ずるものは、ここでも新しい問題のまえに立たされたといわなければならない。全篇を通じて言及されるマイネッケ、ことに晩年みずからの揺籃でもあった伝統的歴史学への批判者・反省者となっていたマイネッケに捧げられた章節は、多くの訳業を通じて著者積年の専門分野でもあっただけにとくに出色の文章といえる。もちろん、わが国でも彼に関する断片的論文は、その数少しとしない。しかし、真にドイツ史学史の文脈のなかに位置

づけられたマイネッケ論を挙げるとすれば、やはり今後は本書を挙げなければならないであろう。

しかし、白眉はなんといっても最終章、現代西独の「構造史」派史学の輪郭を、その問題の所在とともに、わが国では初めて明らかに対比にした部分であると考え。しかも、フランス「構造史」派との対比において、そのドイツ的個性を、また正統派史学との連続・非連続の両面を、かくまで明白に描出できたのは、永年史学史に思いを潜めた著者にして可能なことであつたと思う。さきにも一言したが、この点「構造史」派史学を過去との完全な断絶において把えようとする欧米の通説とも異なっている。

以上、本書の特徴とすべき点が多いが、そのなかでも主なものについて列挙した。そもそも著作の目的の一つが、従来の説を綜観しつつ新たな問題を提起することにあるとすれば、本書は十分にそれに答えたものというべきである。ただ若干の問題はのこる。本書が史学史であるかぎり、それが学統を明らかにし、正閏をただし、その継承に関心をもつこと、もとより当然である。ただ、多少とも他国の史学にかかわるものとしてこれをみれば、ほとんど奇異にすら思われるこのドイツ史家の正統性への拘泥は、はたして何に起因するのかという素朴な疑問が一つ。二つには、ここに正統派といい、構造史派というが、たんに抽象的理論ではなく、具体的な歴史の叙述と歴史家のメティエにおいて、はたしてそこになにほどの差異があるであろうかという疑問である。さきの疑問に対しては、史家の系譜を追うだけではなく、おそらくはドイツ・アカデミズムの内情、史家のおかれた政治的・社会的環境、総じてここにいる構造史的アプローチこそが採られなければならないであろう。そのとき、第二の疑問もおのずから氷解するはずである。この理論研究を背景に、今後の著者に具体的な歴史叙述を期待するのはわれわれだけでもあるまい。また史学史としてみれば、同じドイツ語圏に属する史家として、ブルクハルトに関する叙述が、いま少し場所を占めていて然るべきかとも考える。しかし、これはあくまでも望蜀の感想である。由来同学者も疎らなこの史学史研究という分野において、いま著実な一業績が結実した。われわれもその功績を評価するに吝かでない。

よって本論文は文学博士の学位論文として価値あるものと認める。